

# 『混効験集』の文法の研究

高 橋 俊 三

## はじめに

1711年に琉球王府によって編纂された『混効験集』は、辞書という性格から文が少なく、文法、特にその構文に関する資料は少ない。しかし、副題に「内裏言葉」とあるように、王府の女官の言葉が主として集められているので、敬語の形態的研究には多くの材料を提供してくれる。また、書かれた年代が明確であるし、その草稿の原本もあるので、資料的信憑性が高く、貴重なものである。

以下、その『混効験集』を対象にして、当時の沖縄方言の文法、特に、動詞・形容詞・敬語法の特徴を明らかにしたい。

## 1、動詞の活用

活用の型が変化する例がいくつか見られる。

『おもろさうし』では、本土の上二段に活用する語が下一段に準ずる活用（以下「準ずる」を省略する）<sup>(注1)</sup>をしているが、『混効験集』においてもそのような傾向がある。次の例の説明文中（すなわち本土語）の「わぶれ」は上二段活用であるが、見出し（すなわち方言）の「わべれ」は下一段活用の已然形である。

「“わべれ”=何にても思事のたらずして悔事を云。箒木に『俄にとわぶれど人もきゝ入ず』と有。侘ノ字也」<sup>(注2)</sup>＜混690＞

次の「おけ」は、本土の上二段動詞「起き」に当たるものである。しかし、方言は「おき」ではなく、「おけ」なので、下一段活用にあたる。

「みすとめて“おけて”庭むかて見ればあやはべるむざうが花どそよさ」＜混73引用琉歌＞

また、『おもろさうし』では、下一段に活用する語が、連用形を除き、ラ行四段活用化しているが、『混効験集』でも同様と考えられる。「みおやす」は、もとサ行四段活用であるが、次の「みおやすら」と「みおやすれ」は、各々ラ行四段活用の未然形と命令形と考えられる。

「“みおやすら”=進上の事。おやすら共云」＜混306,889＞

「みおやせ=主上に捧る物を云也。“みおやすれ”などゝ云」<sup>(注3)</sup>＜混767＞

また、「漢語＋サ変動詞」に対応する語は、ラ行四段活用をしたらしい。次の「ねずへる」は、本土古語の「念ず」が「ねず」を経て変化したものである。

「“ねずへる”ものどおほいよとる=物事に能堪忍せよと云事なり。物ねず共云。漁人云、時によりて餌をつこせども釣をあげず。堪忍してゑる時は大魚をつと云事あり。其れにいへかけたる言葉なり。(後略)」＜混1092＞

ちなみに、『英琉辞書』には、eNdure の項に「niziung」とあり、『沖縄語辞典』には「nizijuN

0 (= raN, = ti) こらえる。耐える。」とあり、『今帰仁方言辞典』には「ニザ(一)ルン 規1ラ a) <念じる。我慢する。堪える。こらえる。>とある。すべてラ行四段活用をしている。

次の「エンゼ」は、『混効験集』の説明にあるように、源氏などに出て来る「怨じ」(サ変・連用形)の変化したものである。

「いむせもの = [ネチケ人杯云心カ。物“エンゼ”ナド>、源氏ニ多キ詞也]」<混951>  
 ちなみに、『沖繩語辞典』によれば、「漢語(主として一字漢字)+サ変動詞」に対応する語は、次のようにラ行四段活用をしている。

cizijuN (他 = raN, = ti) 禁止する。

sizijuN (他 = raN, = ti) 煎じる。siNzijuN ともいう。

niNzijuN (自 = raN, = ti) 念ずる。祈る。信心する。

siNzijuN (自 = raN, = ti) 信じる。信心する。

sjo:zijuN (自 = raN, = ti) 生じる。

上記の「ねずへる」と「ゑんぜ」と『沖繩語辞典』の例を考え合わせると、『混効験集』の時代には、「漢語+サ変動詞」に対応する語はラ行四段活用をしていたと推察されるのである。

活用が全く特殊なのは「無い」を意味する語である。これは形容詞的なものと動詞的なものが混淆している。『今帰仁方言辞典』には「ネーは古代語『なふ』の連用形『なひ』か」とある。

「御情けにまやぬ人や“ない”さめ」<混363琉歌>

「じゅつ “なへ” = 差迫窮屈するを云。無術と書か」<混838>

## 2、動詞の活用形

本土語の動詞語幹にそのまま対応する「基本語幹」と、「連用形+居り」から生じた「融合語幹」と、「連用形+て」から生じた「音便語幹」の3つに分けて論ずることにする。

### (1) 基本語幹

#### (a) 基本語幹・未然形

①単独で推量・意志を表したり、比較を表す「より」が後接したりしている。

「“みおやすら” = 進上の事也。おやすら共云」<混306>

「でい “いきや” と云時は、いざまいらうと云事」<混866>

「“もうけら” よりやたばへ = 万つ物求ランヨリハ有物よく秘藏せよといふ事なり」<混1091>

②助動詞「う」(「ふ」とも表記)が後接した例が見られる。(『おもろさうし』に現れる「ん」「め」「まへ」などの形は、接尾辞化した「さめ」以外は使われなくなっている。)

「“あんまいらふ” = 子の親にあまゆるを云。和詞にはあまると云」<混822>

「あまへわちへ = よろこび之事。(中略) あまへてと云は馴るる心。琉詞に“あんまへらう”と云心か」<混685>

③打消の助動詞「ぬ」が付いている。

次の「まやぬ」は「迷わぬ」の音変化したものである。

「木草さへむ風のおせばそよめきよれ おなさけに “まやぬ” 人やないさめ」(迷わぬ)

## &lt;混363琉歌&gt;

「あにや“なやべらぬ”=左様にはえならぬ也。おけがはざる言葉なり。只“ならぬ”とも云」<混382>。

- ④「れる」がついて、受身・可能の意味を表している。

「よすゝめがなればありち“をられら”ぬ」<混74引用琉歌>。

上の「ありちをらりらん」を『琉歌全集』<522>は「じっとしておれない」と訳している。

- ⑤接続助詞「ば」が後接して仮定条件を表している。

「“たうれら”ばはらさぐれ=転倒する時は親族を探り求めよと云事」<混1080>

- ⑥接続助詞「ば」の融合同化した例も見られる。

「すゑんの“おつさべら”いぢへやうおつさうれ=内裏晩のさくりの時にうたふ詞なり。

外の人の居らば出て参れと云事也」<混388>

## (b) 基本語幹・連用形

名詞に転成する用法が多い。その前後に名詞や接尾辞が付いて、複合語を作ることも多い。ここでは、その典型的な例をみるだけにして、詳しくは語彙論で取り扱うことにする。

「“とぼし”=明松。たいまつ。続松共書也」<混138>

の「とぼし」は「ともし」(灯し)の音変化したものである。「とぼし」「ともし」も本土古語にあり、名詞形の形で沖縄に伝ったものか、沖縄独自で名詞形を作ったのか、はっきりしない。

「みそ“かけ”=衣架と書」<混157>

の「みそかけ」は「みそ」(御衣)と「かけ」(掛け)の複合語である。

「“つかなひ”ばうと=鳩の事。やばうと」<混93>

中止法の用法は、辞書の性格もあって、用例は見当たらない。

## (c) 基本語幹・終止形

- ①文を終止する。辞書の見出しにする典型的な形の一つとなっている。

「“とまへる”=物を探束之事。又人など尋るにも云」<混928>

「火をけす事をおまつ“さます”と云」<混884地の文>

その他「つむきる」(摘み切る)<混1103>、「のろふ」(しかる)<混921>、「あがなす」(集める)<混964>、「おやする」(野菜・薪類を納める)<混901>などがある。

- ②禁止を表す終助詞「な」が後接している。

「“きかす”な=きかするなと云事」<混698>

「“まろばす”な=宛転する事なかり」<混844>。

## (d) 基本語幹・連体形

- ①係助詞「ど」の結びになっている。

「ねずへるものどおほいよ“とる”」<混1092>

②ごくまれであるが、名詞に転成している。なお、これは「り」の特殊な音変化とも考えられる。

「すもる=（<sup>スモリ</sup>艇）」<混1148>

## (e) 基本語幹・已然形

## ①「ば」が付いて確定条件を表している。

次の「とめば」は「と＋思えば」の融合したものである。

「よすゝめが“なれ”ばありちをられらぬおめさとが使のにやきよら“とめ”ば」<74引用琉歌>

「みすゝめておけて庭むかて“見れ”ばあやはべるむざうが花どそよさ」<73引用琉歌>

「よひもの“むつれゝ”ばたゝみのへりこみよへ、わるいもの“むつれゝ”ばつななわかるよむ」<混1079引用諺>

なお、係助詞「す」の結びの例は、見つからない。

## (f) 基本語幹・命令形

## ①命令の表現で文を終止させている。

「たうれらばはら“さぐれ”＝顛倒する時は親族を探り求めよと云事」<混1080>

「人はごくぼさつのきも“もて”＝五穀を敬つて菩薩と称する物ならん。穀のみのり次第に穂をたるゝごとくに人みな君の俸禄をうけ富貴に成次第つゝしめよといふ言葉なり」<混1078>

その他、「とむたてれ」（急げ）<混359>、「はれ」（走れ）<混730>、「さうれ」（連れろ）<混830>。「されされ」（去れ、去れ）、「どけどけ」（退け、退け）<混960>、「たばへ」（秘蔵せよ）<混1091>、「あまへれ」（甘えよ）<混982>、「すばいれ」（甘えよ・ふざけよ）<混982>などがある。

## (2) 音便語幹

『混効験集』の接続語幹では、「動詞連用形＋て」に直接対応する形のみがある。言いかえると、「動詞連用形＋て＋居り」や「連用形＋て＋有り」などの融合した形は見当たらない。

## ①サ行四段動詞

次の「いごまち」は、本土語に対応語が見当たらないが、『おもろさうし』（巻3の1）に「いぐます」の形があるので、これはサ行四段動詞に対応することが分かる。

「“いごまち”＝とよむ事」<混358,887>

## ②ハ行四段動詞（3音節以上の語）

次の「むかて」は「向ひて」の音便形である。また「よしろて」の対応語は不明であるが、『混効験集』<混934>に「参ると云事をよしろひと申也」とあり、連用形（名詞形）は「よしろひ」であることが分かる。

「庭“むかて”見れば」<73引用琉歌>

「“よしろて”参進する事」<混320>。

## ③ラ行四段動詞

次の「とがて」は、説明文から「尖りて」の音便形と考えられる。

「“とがて”＝神酒などの酢気入候を云。和詞には人の言葉過たるも云か」<混932>

## ④マ行四段動詞

次の「拝で」「つで」は各々「拝みて」「つみて」の音便形である。

「“拝で”すでら」<混337引用琉歌>

「吾が身“つで”みちへど人の上やしよる」<混792琉歌>

### ⑤上一段動詞

次の「みちへ」は「見て」の口蓋化したものである。

「吾が身つで“みちへ”ど人の上やしよる」<混792>

### ⑥下二段動詞

次の「おけて」は「起けて」にあたり、下二段に準ずる活用をすることはすでに述べた。

「みすとめて“おけて”庭むかて見ればあやはべるむさうが花どそよさ」(起きて)<73引用琉歌>。

次の「むでゝ」は「濡れて」の音変化したものである。

「しほと“むでゝ”=ひたゝゝとぬるゝと云事」<混709>

次の「すでゝ」は「巢出て」にあたる。

「もゝすで“すでゝ”=冥加難有と云事」<混855>

次の「おきれて」は、動詞「おきれる」の連用形+「て」であろう。この語幹「おきれ」は、<sup>(注5)</sup>首里方言のウチリ(薪が燃えて炭火のようになったもの)や、高知方言の「おきれ」(炭や薪の火)や愛媛<sup>(注6)</sup>方言の「おきれ」(炭や薪の燃え残り)などと関係あろう。

「おきれて=炭火などを云。火“おきれて”と云ハ火のながるゝ事」<混884>

次の「とだいち」は、本土語の「途絶えて」に対応するものである。

「“とだいち”=物の騒動して又静なるを云。湍ト書く也」<混824>

「て」が「ち」と口蓋化している点に注目される。これは「途絶えて」の「え」が*i*と変化した後に、その*i*の影響で口蓋化したのである。

### ⑦サ変動詞

次の「しちへ」は「して」の口蓋化したものである。

「のうのつら“しちへ”いきよが=何の顔せありて行か也」<混1081>

### ⑧ナ変動詞

次の「いち」は、濁点があることに注意したい。現在の首里方言で「行く」を表すイチュン是不規則活用をし、基本語幹・連用語幹・短縮語幹などは、「行く」に対応し、音便語幹から作られる形は「往ぬ」に対応している。現存しているもので最も信頼できる尚家本『おもろさうし』ではすべて濁点が付けられていない。したがって『おもろさうし』の「いちへ」は、「行きて」の音便形か、「往にて」の音便形か、決定できない。しかし、『混効験集』には「いち」と濁点が付いているので、遅くともこれが書かれた18世紀初期には、「往にて」に対応していたということになる。

「もとふく“いち”こうなどゝ云。はやく行てこよという心なり」<混859>

### ⑨ラ変動詞

次の「やべて」は「侍りて」の音便化した形である。

「もゝすで“やべて” 冥加難有といふ事なり」<混328>

以上をまとめてみると、四段動詞とラ変動詞の音便によって生じたと推定されるイ・ウ・促音・撥音はすべて脱落している。さらに、「て」にあたる部分は、サ行四段・上一段・サ変動詞に準ずる語では「ち」に、ハ行・ラ行四段動詞と下二段動詞（ヤ行下二段動詞は除く）では「て」に、マ行四段動詞では「で」になっている。これらのことは、『おもろさうし』と基本的に相違がないといえる。ただ、ナ変動詞の「いち」とヤ行下二段動詞の「とだいち」は、例外ということではないが、すでに述べたごとく注目にあたいする。

### (3) 融合語幹

#### ①融合語幹・未然形

次の「きよら」は「来る」の連用形「き」+「居り」の未然形「おら」に対応する。

「おめさとが使のにや“きよら”とめば」<74引用琉歌>

琉歌の音数律からすると、キュラ（あるいはチュラ）と2拍で発音されていたことが分かる。これにより、「融合語幹」が生じていることが窺える。なお、琉球方言史的な問題点である、「継続」の意味を失っているかどうかであるが、「来つつあるだろう」「来る途中だろう」の方がせっぱつまった感じがしてより良いように思われる。しかし、「来るであろう」と解釈することも可能であろう。

#### ②融合語幹・連用形

次の「こみよへ」は「くみ」（踏むの意）+「居り」に対応する。

「よひものむつれゝばたゝみのへり“こみよへ”わるいものむつれゝば つななわかるよむ」<混1079>

全体は「悪い者と睦れると畳の縁を踏み、悪い者と交わると綱や縄にひっかかる」の意味である。「こみよへ」は恒常的動作を表していて、継続の意味はない。

#### ③融合語幹・終止形

前の例<混1079>の「かるよむ」は、「かかよむ」（「掛かり居り+む」に対応）の誤写と考えられる。全体の意味からして、継続の意味はなさそうである。

次の「めよむ」は「見え居り+む」に対応するものである。

「おほまだら“めよむ”=さだかに見えぬ心なり」<混1090>

「大きなまだらに見える」ということから、「さだかに見えない」という説明の意味と等しくなる。句なので継続の意味があるかどうか不明である。次の「めしよはべむ」も同様である。

「おへむ“めしよはべむ”=御召寄の事。および“めしよはべむ”共云」<混360>

次の「どうやんけん」は、「どう+やんじゅん」（直訳「自分を損なう」）と関係ありそうであるが、未詳である。もし、融合終止形なら、接尾辞「む」が「ん」に音変化し始めていたという例になる。これも継続の意味があるかどうか不明である。

「どうやんけん=不意に僭事をなして自非を知り、恥悔謙るを云」<混842>

#### ④融合・準連体形

準連体形というのは、「動詞連用形+居る」の末尾の「る」が脱落した形を言う。次の「そよ」は「吸い+居る」の融合したもので、「さ」が後接して「る」が脱落している。「吸っているさ」の意味で、持続の意味がある。

「みすとめておけて庭むかて見ればあやはべるむざうが花ど “そよさ”」<73琉歌>

次の「そなれよ」は「そなれ+居り」の融合したもので、「が」が後接して「る」が脱落している。<混669>の「そなれ なぐさむ心歎」を参考にすると、「そなれよが」は「安住しているか」の意味で、継続の意味がある。

「北京お主日やずまに “そなれよ” が」<混894琉歌>。

次の「いきよが」は、継続の意味はなさそうである。

「のうのつらしちへ “いきよが” 何の顔せありて行か也」<混1081>

### ⑤融合語幹・連体形

次の「吸ゆる」は「吸っている」という継続の意で、「ねたさ」を修飾している。

「みすとめて起きて庭向かって見れば、綾蝶無蔵があの花この花 “吸ゆる” ねたさ」<全集1150>

次の「まがゆる」「しゆる」は、おのおの「曲がり居る」「知り居る」の融合したもので、「ど」の結びになっている。また、ともに恒常動作を表していて、継続の意味はない。

「おゑべやうちにかいど “まがよる”=指や内ニマガル也。(以下略)」<混1118>。

「吾が身つでみちへど人の上や “しよる” 無りするなうき世情ばかり」<混792引用琉歌>

### ⑥融合語幹・已然形

次の「そよめきよれ」は継続の意味はない。

「本草さへむ風のおせば “そよめきよれ” おなさけにまやぬ人やないさめ」<混363琉歌>

次の「しよれば」は、前後関係からしてオモロ語で、それは当時の語では「しておれば」に当たるという解説である。したがって、『混効験集』の時代は、継続の意味を表すには「しておれば」を使うということなので、融合形は継続の意味を表さなかったことを暗示する。

「しよれば しておれば」<混1000>。

以上、『混効験集』には融合語幹による諸活用形がそろって見られる。また、アスペクトの観点からは継続の意味があるものも、ないものもあり、『おもろさうし』では継続の意味があり、現在の首里方言ではほとんどないという時代的変遷からすると、『混効験集』の時代はその中間の様子を示していることになる。

## 3、形容詞

沖縄方言の形容詞は、本土方言の形容詞に対応する形（以後「基本形」という）と、本土方言の形容詞語幹に「さ」が付いた形（以後「サ語幹」という）と、それに「有り」が融合した形（以後「融合形」という）に分けて論ずることにする。

### (1) 基本形

基本形の語幹に接尾「げ」が付く例が稀にある。

「“おぎもかなしげ”の首より天がなしあすらまんちやうはれ拝ですでら」<混337琉歌>  
また、基本形の連用形を疊語にして強調を表す用法が見られる。

「みすここまく＝能々細密の心なり」<混354>

地の文においては、ウ音便も見られるが、方言ではない。

「ねはこの＝おもろの名人にて、おもひねやがり世を“同じふ”せし人也」<混511>  
また、基本形の連体形の例も3例見られるが、稀な用法と推察される。

「“またい”もの＝全者。又正直なるものと云にも叶にや」<混845>

「“よひ”ものむつれゝばたゝみのへりこみよへ “わるい”ものむつれゝばつななわかる  
よむ」<混1079>

## (2) サ語幹

まず、サ語幹の末尾を「さ」と表記した語であるが、その本土語と直接対応する語は、「あはさ」（「淡さ」に対応）<混910>、「おんたさ」（威光有て重々したる様。「重たさ」に対応）<混399>、「きたなさ」（「汚さ」に対応）<混707>、「たうとさ」（「尊さ」に対応）<混674>、「ねたさ」（「妬さ」に対応）<混701>、「ねぶさ・ねむさ」（遅い意。「にぶさ」に対応）<混386, 712>、「ねぶたさ」（「眠たさ」に対応）<混692>、「はつかさ」（「わずかさ」に対応）<混664>、「まあさ」（「うまさ」に対応）<混346>、「まさなさ」（「正なさ」に対応）<混815>などがある。

次の「むざうさ」は、鹿児島方言などの「むぞうか」と同源である。

「おかなしや＝愛敬する心なり。俗に“むざうさ”ともいふ」<混349>…「御かなしき」に対応。

以上すべて、ク活用形容詞に対応している。

間接的に対応する語は「きよらさ」「はづかしげさ」である。「きよらさ」は名詞の「清ら」に「さ」を付けて、形容詞化させたものである。

「きよらさ＝美麗なり。清の字を書。和詞にも通ふ。徒然草に「万にきよらを尽くしても」

又は「手足などのきよらに肥あぶらつきたらん」と有も此心なり」<混338>

「はづかしげさ」は「はづかしげ」に「さ」を付けて、形容詞化させたものである。（「げさ」は沖縄方言で発達して種々の語に付き、「…そうだ。…らしい」の意を表す助動詞のようになる。）

「はづかしげさ＝はづかしきさま也。源氏同巻に「右の中將はましてすこししづまりて、心はづかしげさまさりて」と有」<混677>

次の「いちきやさ」は、ミジカサ>ミジキャサ>ンジキャサ>イジキャサと変化したものであろう。首里方言ではインチャサンと言う。なお、ミガイに変化する例に「味噌」をインスというのがある。

「いちきやさ＝短き事」<混727>

対応が不明な語は「おやむめさ」と「がならさ」である。「おやむめさ」は「おやぐめさ」の音変化したものであるが、それ以上のことは不明である。

「おやむめさ＝恐多と云事」<混702>



次の「がならさ」は、田島本注に「心ノ活発ニハタラクモノニイフ。ガナルモノトモ云」とあり、伊波本注に「今は専ら少女などの敏捷にて骨惜しみせざるを云ふ」とあるが、対応語不明である。

「がならさ＝かしこきと云心也」＜混829＞

次に、サ語幹の末尾を「しや」と表記した語で、本土語と直接対応する語は、「いむまへましや」（「いまいましき」に対応）＜混383,693＞、「おかなしや」（「御かなしき」に対応）＜混349＞、「おかばしや」（「御香ばしき」に対応）＜混347＞、「おとしや」（「おどろし」に対応）＜混949＞、「をぞましや」（「おぞましき」に対応）＜混387,713＞、「いちよなしや」（「いとなしき」に対応）＜混335＞、「さかしや」（「さかしき」に対応）＜混688＞、「ほしや」（「欲しき」に対応）＜混726＞、「もどかしや」（「もどかしき」に対応）＜混695＞などがある。これらは、すべてシク活用形容詞である。

間接的に対応しているのは、「アナガチシヤ」と「物よつくわしや」と「わさらしや」である。

「あながちしや」は、副詞「あながち」に接尾辞「しき」が付いたものである。

「あながち＝強なり。“アナガチシヤ” 共云ナリ」＜混875＞

「物よつくわしや」と「わさらしや」は、おのおの「物欲」「わさ」に接尾辞「らしき」が付いたものである。

「物よつくわしや＝偽の事」＜混721＞

「わさらしや＝はやき心なり。和詞にも同じ。は（や）き稻を早稻<sup>ワサイネ</sup>と云り」＜混333,807＞  
対応が未詳なのは、「およたしや」（良いの意）＜混348＞、「おむしらしや」（おいしいの意）＜混346＞、「ひろましや」（不思議の意）＜混718＞、「にぢしや」（味が悪いの意）＜混909＞、「おぢやむなしや」（柔和の意）＜混949＞などの語である。

以上の形容詞を首里方言と比べると、原則として、『混効験集』で「…さ」と表記されているものは、首里方言で「サン」となり、「…しき」と表記されているものは、「…シャン」となっている。ただし、「がならさ」は例外で、「ガナラーシャン」となっている。

### (3) 融合形

『混効験集』には融合形の例は見当らない。

## 4、敬語

### (1) 尊敬語

#### ① おわる

「おわる」は『おもろさうし』では、居る・来る・行くの尊敬動詞として用いられ、動詞の連用形に接続して「よわる」「わる」の形で、「…される」の意の補助動詞として、また接続形に接続して、「…しておられる」の意の補助動詞として、よく用いられている。『混効験集』で動詞として見られる次の例は、「来たれ」と訳していることから、敬意がなくなっているようである。

「あうれ=来れと云事」<344,865>。

また、補助動詞として見られる次の例は、「御」を朱で追加していることからして、普通では敬意をほとんど失っていると考えられる。

「おことあわしやうちへ=御言葉を合せてなり」<1066>。

また、『おもろさうし』<6の54>では「おことあわしよわちへ」とあり、その表記の相違からして、アワシヨワチェからアワシヨーチと長母音に変化していると考えられる。なお、接続形に接続した例は見当たらない。

鹿児島県大島郡の与論と沖縄県の先島地方では、現在も用いられている。

## ②ちよわる

「ちよわる」は「来」+「おわる」の融合したものであり、居給う・来給う・行き給うの意で『おもろさうし』でよく用いられている。

「ちやうはれ=万歳万々歳幾久しく御座ませといふことなり。琉歌に「おぎもかなしげの首より天がなしあすらまん“ちやうはれ”拜ですでら」<混337>

次のように、名詞形も見られ、「行幸」の意ともなっている。

「めしよわへおみこし=御腰物。是は御二通有之。壱通は外“おちよはへ”、且又節供ゝに御召、壱通は番之日番中下庫裡御出仕の御時被召」<混121>

## ③いもうる

「いもうる」は、「いみ」+「おわる」の融合した語で、『おもろさうし』にはみられない語であるが、「おわる」「ちよわる」の衰退とともに、活発に用いられるようになったと考えられる。

「おつさうれ=是に來れと云事なり。ちと敬ふ方には“いもうれ”と云」<混301>

「ねか=後刻也。ねか“いもうれ”と云。後刻ござれと云事なり」<混61>

この語は、仲宗根政善によると、「もールン」(「も」は{?m}を表す、以下同様)、「うモーイン」「もーユン」「もーいん」、「モーユン」、「モーイン」、「モーン」などと変化して、広く沖縄本島およびその属島にわたり、平民の敬語として用いられている。なお、海を越えて、奄美大島<sup>(注8)</sup>につながり広がっている。

## ④めしよわる

「めしよわる」は「召す」+「おわる」の複合語で、『おもろさうし』では、「し給う・着け給う・(馬や舟などに)乗り給う」の意の尊敬動詞として、よく用いられている。『混効験集』では、食事をするの尊敬語としての例も見られる。

「めしやうれ=食など参れと云事」<混863>

さらに、「御」+「動詞連用形(名詞)」+「めしよわる」の形で尊敬の意を表す補助動詞としてよく用いられるている。次の「おちよわひ・おちよはへ」は「御」+「ちよわる」の連用形である。

「おちよわひ“めしよわちへ”=(行幸)の事なり」<混326>

「おちよはへ“めしやうち”=行幸。又オはまします心ニモ叶フ」<混879>

なお、首里方言のウチェーイミシユーンは「居る・行く・来る」の貴族に対して用いる敬語

である。

次の「おへむ」は未詳で、「および」は「御」+「呼び」である。

「おへむ“めしよ”はべむ＝御召寄の事。および“めしよ”はべむ共云」<混360>

次の例は「めしよわり」の変化したもので、名詞形である。「おみこし」と複合して、「お召しになる御腰物」の意である。

「“めしよわへ” おみこし＝御腰物」<混121>

#### ⑤めしやる

「めしやる」は「召す」に「有る」が融合したもので、「する」の尊敬の意を表す。次の「めしやれ」は命令形である。その説明からすると、「め」が「む」（実際の音は [m]）と音変化した形も用いられるが、そのばあい、動詞の前の「お」も付けず、敬意が下がることが分かる。

「おちやい“めしやれ”＝極敬ふ言葉也。按司部は、ちやい“むしやれ”と云なり」<混395>

『混効験集』ではこの1例だけであり、前項の「めしよわる」の方がよく用いられたようであるが、現在の首里方言では、「めしやる」は動詞としても補助動詞（接辞）としてもよく用いられている。

また、「おちやいめしやる」は慣用化され、複合語化したらしく、『沖縄語辞典』には「?uceeimi ʒeeN（自・不規則）おいで遊ばす。いらっしゃられる。『居る』『行く』『来る』の貴族に対して用いる敬語。士族同士の普通の敬語は?meNʒeeNである」とある。

#### ⑥あがふる・おしあがる

「あがふる」は「上がり」に「おわる」が融合したものであろう。カメー（食べよ）などと較べると敬語であろうが、敬語の意識が消滅しかけているようである。

「あがふれ＝おぼかふれ。飲食するなり」<混342>

「あがふれ＝食などあがれと云事」<混860>

ところが、「押し」+「上がる」の複合語は、上位の敬語として用いられている。

「“おしやがれ” 召上りノ心也」<混340>

「すゑんみこちやの御盆がなし＝むかし正式にすゑんみこちやにて“おしあがる”御朝夕の供御也。常のお盆がなしは、よりむちにて御げらへ“おしあがる”。近代尚質王がなし御世までは如此となり」<混226>

これは、首里方言などでウシャガユンの形でよく用いられる。さらに敬意を高めるときはウシャガミシェーンと言う。

#### ⑦にきやげる

次の「にきやげる」は『おもろさうし』には見られない語である。

「にぎやけれ＝同上」<混862>

「同上」とは、この項目より2つ前の「食などあがれと云事」<混860>を意味している。

また、次の項目では、「にきやがり」+「おわれ」の融合した形の「にきやがうれ」も、同じ意味だとしている。

「にきやがうれ＝同上」<混861>

田島本の注に「ンチャガウミシヤウレ、田舎ニモ」とある。

沖縄本島北部にはこれと同源のンカギーン・ンキャギーン・ニチャギーン・チャーギンなどが用いられ、宮古佐和田でンカギリ〔Nkagi<sup>(注9)</sup>〕、西原でンキャギー、多良間島でンキャギリ〔Nkjagi<sup>(注10)</sup>〕などと用いられている。また、八重山石垣でンケーン・ンコールン・ンキョールンと<sup>(注10)</sup>言う。『今帰仁方言辞典』の「チャーギン」の項目に「召し上がる、けん（食う）の敬語。チャーガンともいう。平民の目上にいい、外来者や士族の目上にはフサーガンという」とある（アクセント符号は省略した）。

#### ⑧かなし

沖縄方言の「かなし」は、本土古語の「愛し」の意味であり、本土現代語の「悲し」の意味ではない。『おもろさうし』や碑文などでは、名詞に付いて敬意を添える用法がある。『混効験集』にもそれらを引用している。

「みちやる＝見タルト云事カ。『あぢ“加那し”み（ち）やる』とあり」＜混963＞

「ねいしまいし＝長久の事。『按司おそへ“かなし”天の、ないしまいしのや（に）、いつまでもおちょはひめしやうれ』と碑文記にあり」＜混916＞

この用法は『混効験集』の時代の琉歌にもある。

「おぎもかなしげの首より天“がなし”あすらまんちやうはれ拝ですでら」＜混337引用琉歌＞

しかし、動詞の連用形に接続し動作の尊敬を表す用法は、『おもろさうし』には見られなかったものである。次の「おほこひかなし」は「御誇りかなし」の音変化したものである。

「おほこひかなし＝御機嫌能被為遊御事也」＜混390＞

次の「おんだいがなし」は「おのらいかなし」の音変化したものである。「のらい」は首里方言でヌラユン（叱る。「呪う」に関係ある語）にあたる語の連用形である。

「おんだいがなし＝いかり給ふを云。逆鱗也」＜混369＞

この複合語に「する」にあたる語を付ける場合は、「めしおわる」や「めしやる」のような尊敬動詞を付けたと考えられる。ちなみに、『沖縄語辞典』には「また人以外の語につく場合もある。?weesiNganasii misjoori.（お休み遊ばされませ。非常な目上に対する寝る時のあいさつ）など。」とある。

#### ⑨おほかふ

「おほかふ」は、ハ行四段動詞に対応するようである。語源は不明である。

「おほかふ＝飲食する事を云」＜混853＞

また、次の「あがふれ」や「食などくだされた」からすると、尊敬語のようであるが、「飲食するなり」からすると、敬意はないようでもある。

「あがふれ＝“おほかふれ”。飲食するなり」＜混342＞

「おほかうやべて＝食などくだされたと云事」＜混924＞

また、後者は「やべて」という丁寧語が付いている。それだけで「食事される」から「食事を頂く」という意味になっていることを説明しかねる。結局「おほかう」の語源が不明なので、

これ以上は論ずることができない。

#### ⑩尊敬の助動詞「る」

動詞未然形に助動詞（接尾辞）「る」がついて、尊敬を表している。

「とむたてれ＝他所へ人を使ひぬる時こしらへる云。いしゆが“れ”共いふ」<混359>

#### ⑪その他

次の「心也」は「同じ心也」で、前項の「召上リノ心也」を意味している。

「おさゐめしよわれ＝心也」<混341>

伊波本注に「今はウサーインショーリと言ふ。お召し上れの義。サーイは触りの義」とある。すると、「めしよわれ」という尊敬語だけでなく、「おさゐ」も高貴な人が飲食することを間接的に表現することによる尊敬表現だと考えられる。

その他、接頭辞「お」「み・む」や、それらの複合した「みおむ」で尊敬を表す語がたくさん見られる。

「およせ＝上より命ぜらるゝ事いふ」<混322>

「むしやばき＝御梳」<混124>

「みおむしやく＝御み手づから諸臣へ御酒下さるを云」<混311>

### (2) 謙譲語

#### ①おやす・みおやす

「おやす」、およびそれに接頭辞「み」のついた「みおやす」は、「奉る。差し上げる」の意の謙譲語である。『おもろさうし』ですでに用いられているが、『混効験集』でも用いられている。

「もりつぎ＝次酒の事。王府御双紙に各盞にて“おやし”、もり次はぜん御酒よりと有」<混312>

「おじるもの＝野菜薪之類納ヲおじるもの“おやする”と云。三月三日貝のり之類納をひせぐみのおじるものと云」<混901>

「“みおやすら”＝進上の事。おやすら共云」<混306,889>。

次の「おやすら」はこの語の未然形であろう。

「干瀬ぐみ御捧物＝さゞい栄螺びる海松“おやすら”海雲むけこ」<混232>。

なお、今帰仁方言では「お茶などを目上の方に差し上げる」ことを「えースン」〔?eesuN〕と言う。また、「差し上げる」ことを、与那国方言では「ウヤン」と言い、石垣方言では「オイシン」〔oisĩN〕と言う。

#### ②しられる

「知る」の受身形「しられる」は、「申し上げる」という意の謙譲語である。『おもろさうし』でよく用いられているが、『混効験集』でも用いられている。

「おしられ＝物を申上事」<混321>

石垣方言では「シィサリ（ル）ン」〔sisari(ru)N〕という形で残っている。

次の「おつされ」は「御知られ」の音変化したもので、他家を訪問し案内を乞う際の慣用語になっている。

「おつされ=物を申さんと案内をこふ事」<混300>。

首里方言などで、「以前は訪問をする場合に案内を請フ時は、男は『さり』を連呼してゐたり、又は語尾を長く引いて『サリー』と云つたりしていた」という「サリ」はこの「しられる」の音変化したものである。

次の「おつさうれ」は、「御知られおわれ」の音変化したものでしょうか、不明である。池宮正治は「300の『おつされ』に対する答か」と注解を<sup>(註11)</sup>している。

「おつさうれ=是に來れと云事なり。ちと敬ふ方にはいまうれと云」<混301>

### ③おしやげる

「おしやげる」は「押し」+「上げる」の融合したもので、『混効験集』では、「(料理を貴人に) さしあげる」の意で、地の文に出てくる。まだ、文語(共通語)の意識があったようである。

「につまぬき=みつまぬき共云。禁中女官夏冬共正式褻の衣也。袷重着は不仕なり。そなへこちや勢頭部御規式の御盆がなし“おしやげらる”時、此着かたこしぬきにて御宮仕なり。今も有之事也」<混225>

首里方言ではウシャギユンの形で、「(上に)押し上げる」、「献上する。お供えする」、「(髪を簡単にくしで)梳き上げる」の意でよく用いられている。

### ④よろろふ

次の「よろろひ」は命令形あるいは連用形と考えられる。

「よせれ=参ると云事を“よろろひ”と申也」<混984>

次の「よろろて」は接続形と考えられる。

「“よろろて”=参進する事。王府御双紙に『“よろろて”いまふさしむしやべるやう』とあり」<混320>

2例から帰納すると、終止形は「よろろふ」となり、首里方言のユシリユン(参る・伺候するなどの意)の連用形+「合う」の融合したものであろうか。

### ⑤おみのけ・みおみのけ

「おみのけ」は敬意の接頭辞「おみ」と「のけ」の複合語である。「のけ」は未詳。「みおみのけ」は、さらに敬意の接頭辞「み」が付いたものである。

「“みおみのけ”=言上の事 只“おみのけ”と云時は貴人へも云」<混309>。

首里方言では「ウンニユキユン・ウンヌキユン」、さらに上の敬語の「ミュンニユキユン・ヌンヌキユン」の形で用いられている。また、今帰仁方言では「ウンヌキルン」、石垣方言では「ウンヌキ(ル)ン」が用いられている。

### ⑥すでる

「すでる」の「孵化する」という意から、「再生する」とか「頂戴する」とか「光栄にも…する」という意が生じた。

「おぎもかなしげの首より天がなしあすらまंचीやうはれ拜で“すでら”」<混337琉歌>

「もゝすですでゝ＝冥加難有と云事」<混855>

「もゝすでやべて＝冥加難有といふ事なり」<混328>

#### ⑦その他

その他、次のような例がある。

「みおむつかい＝奉屈請事」<混310>

「おむしづき＝供奉する事をいふ」<混317>

「おむしづき」には、伊波本注に「御召付けの義」とある。

「もゝがほうしやべて＝行幸を蒙おりて也」<混327>

#### (3) 丁寧語

「やべる」は「侍る」が上接語と融合して出来た形といわれている。『おもろさうし』に若干出てくる。『混効験集』では、動詞の連用形に接続して「…ます」の意の謙讓語として用いられた例が多い。

「おへむ“めしよはべむ”＝御召寄の事。および“めしよはべむ”共云」<混360>  
 4行四段動詞が上接する場合は、次のように連用形の語尾リ（イ）が脱落する。

「あにや“なやべら”ぬ＝左様にはえならぬ也。おけがはざる言葉なり」<混382>  
 また、体言に接続して、断定（コピュラ）の意の謙讓語としても用いられる。

「あにや“あやべら”ぬ 左様にて侍らぬ也」<混381>  
 これが強意の係助詞「ど」に付くと、次のように融合して「だやべる」となる。  
 「あに“だやべる”＝左様にて侍るなり。然の字に叶か」<混378>

#### むすび

琉球方言史の巨視的な観点からすると、動詞の融合語幹による種々の活用形が形成されつつある一方で、継続の意味は失われつつある点、形容詞のサ語幹による活用形（融合形）はまだ見られない点、敬語がよく発達しているが、「おわる」が固定的に用いられるようになっている点などが、特徴といえる。

#### 〔参考文献〕

- (1) 池宮正治著『琉球古語辞典 混効験集の研究』（第一書房 1995年）
- (2) 伊波普猷『古琉球』（『伊波普猷全集』第1巻所収）
- (3) 伊波普猷「琉球語大辞典」〔草稿〕（『伊波普猷全集』第11巻所収）
- (4) 沖縄古語大辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』（角川書店 1995年）  
 金城朝永ほか「南島方言に於ける敬語法」（『旅と伝説』第4巻第12号 1931年。後に、『沖縄文化論叢 5 言語篇』収録）
- (5) 国立国語研究所編『沖縄語辞典』（大蔵省印刷局 1963年）

- (6) 島袋盛敏・翁長俊郎著『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院 1968年）
- (7) 仲宗根政善「宮古および沖縄本島方言の敬語法－「いらっしゃる」を中心として－」（『沖縄 自然・文化・社会』 1976年。後に、『琉球方言の研究』に収録）
- (8) 仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』（角川書店 1983年）
- (9) 外間守善編著『混効験集 校本と研究』（角川書店 1970年）
- (10) 真境名安興「混効験集にある琉歌について」（『沖縄毎日新聞』1912年。『真境名安興全集』第4巻に収録）

# [注]

- (注1) 拙著『おもろさうしの動詞の研究』（武蔵野書院 1991年）を参照されたい。また、以下の『おもろさうし』の動詞に関する記述についても同様。
- (注2) 『混効験集』の本文と項目番号は参考文献の(1)による。なお、それには校異を示すために（ ）や〔 〕などのカッコを用いているが、引用にあたって省略した。また、見出し語と説明部分とがはっきり分かるように、その境いに「＝」を付け、筆者が問題にしている部分を分かりやすくするために“ ”を付けた。以下同様。
- (注3) ラ行四段活用化する前に、下一段活用をしていたと考えられるが、『混効験集』だけでは資料不足で十分な検証はできない。
- (注4) 参考文献の(5)による。ただし、アクセント記号を省略し、意味は対応が分かるようにした。
- (注5) 参考文献の(5)による。ただし、音韻は片仮名に変更した。以下同様。
- (注6) 『日本方言大辞典』（小学館 1989年）による。
- (注7) 『沖縄語辞典』に「juma（読もう）と junura（読むだろうか）との対立は肯定普通態現在の上に認められるようで（後略）」とある。
- (注8) 参考文献の(7)による。
- (注9) 参考文献の(7)による。
- (注10) 宮良当壮著『八重山語彙』（東洋文庫 1930年。後に、『宮良当壮全集8』に載録）による。
- (注11) 参考文献の(1)による。

\* 本論文は沖縄国際大学特別研究費による研究成果の一部である。